

転生者は歌姫を守るためにがんば
るようです

葉っぱの妖怪

フィーネ所属の魔術使いとしてシンフォギア世界を生きる転生者さん。魔術でこそそそ装者を援護しつつ、影からの刺客を切り伏せる。

世界の修正力に引っかけられない様に気を付けつつ、今度こそ大切な人を守るために命をかける。

現在全話書き直しを終了し投稿を再開しました

目次

IF…もしも彼がTS女神化転生してたら	1
転生者は裏でこそこそ動き出すようです	13
転生者は死んで生まれ変わったようです	17
立花響はその手に何かを掴むようです	25
転生者は再びお日さまと話すようです	31
転生者は血で汚れても向き合い続けるようです	39
転生者は守るために尽力したようです	55
番外編 転生者はハロウィンを楽しんだようです	75

IF:もしも彼がTS女神化転生してたら

もしもケトスのシンフォギア前の転生先が女神さまだったら

朝、目が覚めると違和感に気づく。体を起こしてみると布団が丁度人ひとり分盛り上がっていた。またか・・・と思いつつ布団を引っぺがす。外気が肌に触れて少し震えながらもそれを起こす。

「朝だ、起きないかセレナ」

セレナ、と呼んだ少女は目をこすりながら上半身を起こし、とろんとした表情で私を見るとにへらと私以外には自身の姉にしか見せない顔で口を開く。

「おはようございます。まだちょっと眠いので一緒に寝ましょ？」

「それは貴様が服を着たら考えてやろう」

そう、彼女は私の布団に潜り込むときはいつも全裸なのだ。何度も注意するがそれをやめようとはしない。

「いつも裸で寝るアナ姉さんに説得力はありませんよ?」

・・・裸で布団をかぶると気持ちよく寝れるから私はいいのだ。そう言いながら頭の蛇がセレナに優しく枕をぶつけた。

私、いや俺が転生したのは古代のギリシャ。所謂ギリシャ神話の時代。そこで二人の女神の妹として転生した。最初は戸惑った。転生前は男だったこともあるし、なによりその二人の姉が型月のステンノとエウリュアレ、トドメに俺はメドウーサになっていたんだから。女の子の体って柔らかいんだとかマジで二人の姉きつくね?とかでもそれが愛されているって実感できていやまあ、すごかったとだけ。

そんな俺が私になったのは、ステンノとエウリュアレ・・・上姉さまと下姉さまの背を越した日の夜。いつものように弄られながらも三人仲良く眠りにつくはずだったのに、その日だけは何もせず眠りにつく二人に戸惑いながらも、たまにはこ

んな日があってもいいかと二人の間に体を滑り込ませてウトウトし始めたころ、二人に急にぎゅっと抱きしめられた。えっ？えっ？とテンパっていた俺に二人が口を開く。

「駄メドゥーサ、あなたは私たちを越したのね」

「本当にやになるわ、今度からあなたの頭を撫でられないじゃない」

「本当、少しずつ成長していつかは私たちなんか目じゃないのね」

「ああ、本当に」

「「うらめしい」」

その時が最初で最後に聞いた姉さまたちのメドゥーサという存在に対しての心からの愚痴だった。いや成長しきってライダー時代になっても背が高いわとか云々言われたけどその時だけのそれは全く違う言葉のように聞こえてそしていつも俺を弄ってる姉さまたちが急に小さく思えた。だから私は二人の手を握りしめて言った。

「私が、姉さまたちを守ります。ずっと、永遠に」

それを聞いて駄メドゥーサのくせに生意気なとかいつものように弄られた。そ

れからはまあ、神話通りになって約束は守れなかったけども。ただ違う点を挙げるとしたら、私がアテナの呪いをかけられた理由がポセイドンとか関係なくただ美しくそして強かったからということ、体は怪物になってでも心はいつまでもそのままだったこと、ペルセウスに殺されそうになった時に姉さまたちに庇われたこと、そして、ペルセウスを殺したこと。

当時の私は怒り狂っていながらも冷静だった。今、怒りに身を任せて暴れても何も成せずに死ぬだけだ。ならばより多く復讐をなすために私にできることを……。そして私は魔術王から聖杯を受け取り、特異点を発生させた。

カルデアに負け、姉さまたちから感謝を伝えられ、本物に羨ましがられながら死

んだ私は今度は女の子の赤ん坊として生まれた。両親は悪い意味で研究者だった。生まれたばかりの私に聖遺物適合のための実験を繰り返した。その一つ、ハルペーに適合した私は F。I。S の研究所でレセプターチルドレンとして在籍することになった。そこでマリアにセレナ、ママ、切歌に調と出会った。特にセレナとは数少ない適合者として共に実験を繰り返す日々を送るうちにもう一人の姉として慕われるようになり、マリアから嫉妬されるようになり、そんな今に心地よく感じるようになってそして、あの日を迎えた。

ネフィリムの稼働実験、もしもの時の戦力として待機を命じられてた私はセレナの絶唱をただ見ているだけだった。絶唱の衝撃を崩壊しかける研究室で血を流しながら今にも命の灯が消えそうになった私はハルペーを歌おうとして両親に止められた。貴重な適合者にもしものがあつたら——、あれと違ってお前は優秀な——。その時、私は無意識のうちに両親を突き飛ばしていた。セレナを、私の大切な人を見殺しにしようとした両親に対して私の中で何かが終わるのを感じた。

私に突き飛ばされて嘔然とする両親に私は言い放った。

「貴様らはもう、私の家族なんかではない。私の家族は、あの子たちだ」

その時、ハルペーが体から剥がれる。シンフォギアとして、聖遺物としてのハルペーが私から離れ、宙に浮く。そして、ドロリと溶け出す。思わず誰もが動きを止め、その異様な光景に目を奪われる中、私だけがセレナの元へ走り続ける。溶け始めたハルペーはその原型を失い、異質なもののへと姿を変え、再び私の元へと戻ってくる。ハルペーだったものは私に纏うことなくそのまま中へと吸収されていく。私の体が悲鳴を上げる。黒くどす黒い復讐と言う懐かしい感情に支配される。だが今回はそれだけではなかった。姉さまたちとの日々の想いで、そしてマリアとセレナとの想いでが私の中にある。私はもう――

誰も失わない。

天井が崩落し、それがセレナへと襲い掛かり、粉々に碎け散った。その場にいた人は巨大なソレに畏怖の感情を覚える。まるで蛇に睨まれた蛙、捕食者と餌のような錯覚を覚え、体が硬直し動かなくなった。私の手の上でセレナが私を見上げる。

「私の大切な家族はとて目が離せないおてんば娘のようだな」

私はゴルゴーンとしての姿になって、いや取り戻していた。いち早く硬直取り戻したのはマリア、瓦礫の山をかけ、私の手の上にのせているセレナの元へと走る。途中転びかけたマリアをもう片方の手で器用につまみあげるとセレナを乗せている手に乗せた。

「もう一人もかなりのものだったな」

のちにマムからその時の顔はまるで女神のようにやさしいものだったらしい。

それからというものの、ゴルゴーンとしての姿はいわゆるシンフォギアを身に纏っているような状態であることがわかり、すぐにいつもの姿に戻った。負傷したセレナの変わりと言わんばかりに実験につぐ実験を受け続けて私の中の憎悪は底なしにまで溜まっている。で、ここまでが悪い話。次が良い話だが、元両親が研究所を追いつけられた。元々研究者として三流以下でこの研究所には私という存在がいたから所属できていたらしいが、あの日私から拒絶されたことで完全に要らないものとして追い出されたそう。ハハッザマー。まあ、ほかにも色々あったが割愛。そして今から半年前にマリアたちとフロンティア異変を起こし、二課と共にそれを終わ

らせた。無論、誰も犠牲無しで。その時の影響で完全適合して私の体は完全にゴル
ゴンとなった。なお、尻尾や髪は蛇は変化スキルでごまかせるから日常には問題
ない。

「いただきます」

そして、今につながる。

「アナ姉さん、しょうゆとってください」

「ん、セレナ」

「ありがとう」

最初は私一人だけでだらだらと暮らしていたが、姉妹で暮らしていたセレナがマ
リアが翼と共に海外に行くからと理由を家に転がり込んだ。料理やらなんやらで私
に喜んでもらおうと頑張っているなとは思っていたが、最近になってそれが家族愛
やら親愛では収まり切れてないことを自覚し、どうやって事あるごとにしてくるア

プローチを躲すかが今の悩みだ。表面上隠し通せているが私は完全にレズである。ゆえにセレナのアレコレはぶっちゃけてしまうと心のアロンダイトがオーバーロードしかけるほどにやばい。以前、マリアにそのことを言ったらへえーと言ってハイライトが消えたことも胃痛の元だ。その時の顔はかつて何か気に入らないことがあった姉さまたちを彷彿とさせる顔だった。

「セレナ、今日はどこに連れていくつもりだ？」

「立花さんたちからデートのお誘いが来ているので一緒に行こうと思ったんですけど・・・ダメですか？」

「はあ、それやれば私が行くとでも思うのか。・・・美味しいものを紹介しろと伝えておけ」

なんで想いに答ええないかだと？正直に言ってしまうえば私は嘘の塊だ。それに、私にとってセレナは守るべき者であってな・・・いや言い訳なのはわかってる。でもそれでも、今この日常がなんだかんだでとても心地よくて変えたくないのだ。

だが、いつかは答えなければならぬ。私は皆が好きだから。だから今だけ、今だけは・・・

「行きますよ、アナ！」

「ふっ、またコケるぞ」

このままでもいいさせてくれ・・・

メドゥシアナ・ゴルゴン 愛称…アナ シンフォギア…ゴルゴーン

元聖遺物実験の実験体。完全融合型シンフォギア適合者。

彼女のシンフォギアは元々ハルペーであったが二度と家族を失わないという想いがハルペーと共鳴、ハルペーをエネルギーとして彼女の魂に眠っていたゴルゴーンを蘇らせ、シンフォギアとして世界に定着させた。フロンティア事変までは人間としての姿（姿はライダーメドゥーサで髪形はランサーメドゥーサ）とゴルゴーンの姿をスイッチ出来ていたが、エクストライブの影響で完全に一つとなりゴルゴーンの姿だけになる。完全にゴルゴーンではあるがその存在は怪物でも女神でもな中途半端な形のため本能だけの存在ならまだしも知恵を持つ同等の存在には弱い。

セレナからは友達、姉貴分、姉を経て恋愛的な愛を向けられているが朴念仁のフ

リをして受け流している。が、気づいてもらおうと徐々にアプローチが過激になっているのでこのままの間柄でいたい本人にとっては対応は間違えている。以前、海外にいるマリアに相談をしたが、彼女は気づいていないがマリアも彼女を狙う者であるためやはり対応を間違えている。

転生者は裏でこそこそ動き出すようです

『QUEENS of MUSIC』会場。関係者以外立ち入り禁止区域の入り口で警備員が二人、警備していた。彼らは世界的な歌姫二人の舞台を陰ながら守るために選ばれたとても優秀な人材であり、その佇まいや眼光はこのコンサートを絶対に守るといふ強い意志を感じられる。だが、それだけだ。俺はその二人に正面から堂々と近づく。彼らは今ここにいないべきではない人物がいることに疑問を覚え、俺へと声をかけてきた。

「ケトスさん、ここから先はあなたでも・・・」

「交代です」

前準備の時点で既に顔を合わせているため、少し碎けたような口調で警告しようとするのかぶせるように要件を述べる。彼らは疑問を浮かべながら俺の顔をじっと見つめてくれている。とても好都合だ。

「もうコンサートも終わりが近づいてきました。これから何かしてやろうと考える変な輩はもういないでしょう。ここは大丈夫なので観客用出入り口の警備に合流し

てください」

同時に魔術回路を起動、暗示をかける。するとみるみるうちに彼らの鋭い眼光は徐々に穏やかなものになっていき、やがて暗示が効いたのか持ち場を離れ、偽りの持ち場へと向かっていく。それを見届けてから手に持っていた通信機に一言、セレナと声をかける。それから少しして一人の少女が歩いてきた。

「ケトス兄さん」

少し大きめのボストンバックを抱えて歩いてきた少女、セレナは俺に声をかける。無事にここまでこれたことに安堵しつつ、もう一度通信機を操作しようとして少し視界がぶれた。足から力が抜け、倒れる、つてところでセレナに支えられた。

「ケトス兄さん！大丈夫ですか？」

「ああ、ちよつとさっきまでずっと座ってたから血が回ってないだけだ。すぐ治る」

あんまり納得していない風な顔をしているセレナを尻目に改めて通信機を操作して回線をつなげる。

「こちらケトス。無事セレナと禁止区域に侵入した」

『了解しました。ですが少し遅れているようですが』

「マリアとコネを作りたい連中に時間を取られた。それだけで察してくれ」

『わかりました。あと10分ほどで行動を開始しますのでお早めに』

「了解」

セレナが抱えたポストンバックには色々これからための布石として用意した物が入っている。そんなものを少女に持たせるなと言われるかもしれないが暗示はかける直前にどれだけ相手に警戒させないかが大事でな。誰だってこの場にはいないはずの人間が大きなポストンバックをもって現れたら警戒するだろ。ましてや中身はやばいもんだから警戒を解く手段はない。まあ、それでもなんとかできるんだけどな・・・彼女が俺の役に立ちたいと立候補してな・・・。そんな彼女の表情を見るとね・・・とても断るなんてできないんだ・・・ってことでこうなった。

人に注意しつつ、目的地についた俺たちはバックの中身を取り出し、工作作業に入った。

作業が終わったところには既に事が始まっていた。

『私は・・・私たちはフィーネ！』

俺がマネージャーとしてサポートしていた女性、マリアが高らかに宣言する。歌

姫であった自分を捨てて国を相手に戦うことを。それをテレビ端末で見届けた俺たちは気を引き締めて次の行動に取り掛かるために動き始める。ママやきりしらの二人には伝えず俺たち二人だけに伝えていたこれからの流れを。通信機からマリアの行動に対するママの驚く声が聞こえる。俺はマリアの行動をフォローする旨を告げると通信機を切り、セレナといたずらが成功したような笑みを浮かべつつ歩き出す。「さて、本職始めますとしますか」

ケトス・ミューケーナイ 19歳

米国聖遺物研究機関 F・I・S 所属↓武装組織フィーネ後方支援担当兼魔術師

転生者は死んで生まれ変わったようです

【ケトス・ミューケーナイ】

俺には別の記憶がある。簡単に言ってしまうえば前世の記憶だ。ノイズなんかいない、魔術なんて実在しない世界で学生として生きていた記憶が。

だが、とある何の変哲もない時期からプツンと記憶が途切れている。色々思いついて出そうとしてみたが何も思い浮かばなかったのもその直後に何かしらの理由で即死したんだろうと断定した。

そんな俺は東ヨーロッパのとある地域で生まれた。かなり若い父親に同年代ほどの母親の一人息子として生まれた俺はケトスと名付けられ、それは可愛がられた。赤ん坊のころから意識ははっきりとしていたのでちょっと色々と精神的にキツイことが多々あったが無事成長できていた。

俺が魔術の世界に入ったのは6歳のころ。頃合いを見て魔術を教える予定だった両親は予定通り、俺に魔術を教えていった。まずは魔術回路を開く修行から行い、一通りの魔術を学び、一番しつくり来た強化と錬金術を主に身に付けていった。前

世では学ぶことがなかったことに正直心が踊った。まあ、その時にはここが型月系というのはわかっていたから将来何かに巻き込まれるのかなと思いつつも両親との平穏な日々を過ごしていた。それがすぐそばまで迫っていたのに。

この世界での俺の住んでいた東ヨーロッパ、つまりは東欧諸国では民族同士の争いが問題視されていた。その火種は時間をかけて徐々に燃え上がりそして今から10年近く前、ついに爆発した。民族紛争の始まりだ。俺たち一家も近所の家族みんな荷物をもって名残惜しい我が家を捨ててでも戦火から逃れようとした。だが、遅かった。戦火は容赦なく避難する人たちに襲い掛かった。俺たち一家もそれに巻き込まれた。多くの人たちが一斉にパニックに陥りあらゆる方向から人が押し寄せた。そして突然熱風と衝撃が襲い、俺は意識を失った。

目が覚めたとき、俺は瓦礫の山と化した廃墟で目を覚ました。また転生したんじゃないかと思ってそれは違うと認識した。その場所は俺が意識を失う直前に見た光景に似ていたし、肉が焦げる匂い、飛んできた瓦礫片で裂けたと思われる傷の痛みが俺は死んでないと教えてくれている。周りを見渡すと俺以外に生存者はおらず、そこまで離れてない場所にクレーターが出来ていた。たぶん、榴弾砲か迫撃砲

が俺たちの方に流れ弾したんだろう。それを中心に命だったものが辺り一面に広がっていた。俺が生きているのはおそらく運よくほかの人やその荷物が肉壁となつて熱線や炸裂片を防いだのだろう。衝撃は体の小ささから踏ん張り切れずに吹っ飛んだんだろう。そこまで考えてからようやく両親の存在を思い出した。立っていた場所から考えて両親は俺よりも爆心地に近かった。

ということは……。

「死んだのか……」

ふと頬を水滴が伝うのを感じた。頬に手をやりその水滴が目から流れてきていることを自覚した瞬間、すべてが決壊した。

「うああああああああああああああああああ……！！！！！！！！」
精神が体に引っ張られているとは感じていたがここまで泣くとは思えないぐらいに泣いた。魔術を教えてくれた父親も料理を作ってくれた母親ももういなくなつてしまった。そう思ったらより多くの涙が流れ俺は泣き崩れた。この世の終わりを体現しているようなそんな感じに。数秒、数分、数時間泣いたのかはわからない。だって俺の世界を形成していた存在がいなくなった。ならば俺に生きる意味なんか

あるのか？こんな場所で誰一人いない場所でただ一人だけ……。今の俺に生きている意味なんか……

「だいじょうぶ？」

頭の上から声がかけられた。ゆっくりと顔を上げるとそこには二人の少女がいた。姉妹だろうか、桃色の髪の子の後ろに橙色の髪の子が立っていた。二人とも煤汚れた顔に汚れた服を着ていて、心配そうに俺を見ていた。話しかけてきたのは桃色の姉のほうか。

「ひとりなの？」

静かに頷く。

「どこかいたいの？」

首を振る。

「どこかに行くの？」

何もしない。

「……行く場所ないの？」

少し間を置いてから口を開く。

「じゃあ、私たちと一緒に行き!!」

俺はその言葉と共に差し伸べられた手を握りしめた。

そしてF・I・Sに MARIA たちともども連れてかれ、なんやかんやあってたった今宣言した武装組織フィーネの構成員としてここにいる。ちなみに現在の状況は調ちゃんによる響ちゃんのメンタルフルボッコタイム終了してママから撤退の合図

が出たところだ。舞台裏で待機していた俺たちは待つてましたと言わんばかりにスイッチを入れた。天井が爆破され客席に落ちてくる。たったこれだけだ。二課装者の意識をマリアたちからそらす。これだけでいい。

そのタイミングで巨大な分裂増殖型ノイズがマリアたちのすぐそばに召喚される。それと同時にセレナがステージ上に躍り出る。

「もう一人装者がいやがったのか!？」

マリアとセレナがアームドギアを展開し、エネルギーを溜める。マリアの槍が紫電を纏い、セレナの短剣が白く輝きながら空を舞う。そしてそれを同時にノイズへ放った。

HORIZON+SPEAR

FAIRIAL+TRICK

セレナの二振りの短剣がノイズをバラバラに斬り裂き、マリアの砲撃で吹き飛ばす。そして

「ここで撤退だ?!」

二課の装者に背を向け、撤退を始めたマリアたち。あとを追おうとするも吹き飛

ぶノイズに邪魔され思うように動けない。

そのすきにマリアたちは会場から撤収。ステージ前には二課の装者、そして増殖し形を形成しだしたノイズが残される。思惑通りにノイズを排除することを優先した二課の装者たちは手を繋ぎ、《絶唱》を歌う。三人分の絶唱七色に輝く光となつてノイズを飲み込んでいく。その光を融合症例である立花響が自身の拳に束ねて放つ渾身の一撃はノイズを跡形の無く消し飛ばしその爆発的なフォニックゲインの余波は七色の竜巻となって天高くまで伸びていった。

戦いが終わり、辺りに静けさは戻ったところ、変身を解いた響は膝から力が抜けるように座り込む。よほど調に偽善者と言われたのが堪えたのかその目からは涙を流していた。

「ケトス」

会場通路の影からDr・ウェルがソロモンの杖を持って現れる。この会場での最後の任務がウェルの護衛。万が一があったときのために俺は最後までこの場に残っていた。

「装者たちは動かないようなのでそろそろお暇としましうか」

「了解した。さっさと戻らないとな」

そう言って俺たちは撤収する。ステージ前ではいまだに響の泣き声が響いていた。

立花響はその手に何かを掴むようです

——それが偽善！

あの日から3日、姿をくらましたフィーネはまだ見つかってない。師匠は今のうちに体を休めておけとは言っていたけども今の私はあの子から言われた言葉でいっぱいいっぱいだった。

——痛みを知らないあなたに、誰かの為になんて言って欲しくない！！

胸が、きゅつと苦しくなる。痛みなんか文字通り痛いほどわかっている。わかっているけれど、私のやっていたことは間違いなのかな・・・？

ドン

「うおっ」

「あっ」

考え事ばかりしていたからだろうか、人にぶつかってしまった。ぶつかった拍子に尻もち付いた。何やってるんだらう私・・・。

「大丈夫・・・か？」

そつと手をさし伸ばされる。

「はい・・・大丈夫です。すいません」

その手を握り、立ち上がる。その人は緒川さんのようなスーツを着ている男の人でフィーネを名乗ったマリアさんと同じぐらいの年齢だろうか。とあの子に関係している人を思い浮かべたからかまたあの言葉が頭をよぎる。すると、それが表情に出ていたのだろうか、男の人が口を開いた。

「・・・初対面でアレだが君は悩みでもあるのかい？」

こちらの考えを見通しているかのような表情でこちらを見ている男の人。一瞬、ナンパ？とも思ったけども今の私には誰かに話しを聞いてほしい気分だったし、知らないからこそわかることがあるかもしれないと思って私は答えた。

「・・・相談、乗ってもらってもいいですか？」

それになんだかこの人なら大丈夫な気がする。どこか腰でも下ろそうかと言われてついて行ったのは近くの公園のベンチ。そこに座ると男の人から俺のおごりだと言われていつの間にか買っていたのか缶ジュースを手渡される。お金を渡そうとし

てもいいからいいからと言われてとりあえずプルタブを空けてぐびっと一杯飲む。果物のすっきりとした甘さが喉を通り、少しだけ私を落ち着かせてくれた。

「・・・実はですね・・・」

ぼつりぼつりと機密に関わるところを誤魔化しながら話した。途中、誤魔化しが危ういところもあったけど別に追及せずに聞いてくれた。

私が人助けをやっていること。

それを手を伸ばした女の子に偽善と言われたこと。

それから自分でどうしたらいいのだろうと悩んでいる事を。

「・・・・・・・・」

話終え、辺りが静かになる。男の人は悩んでいるようだった。やっぱり難しかっただろうか。だが男の人がキリッとしたと思うと口を開いた。

「まず俺の結論から言わせてもらおうけどな。無視しな」

「え？」

こういうのをあっけに取られたというんだろうね。思わず口が開くほどシンプルが私が予想してなかった言葉が彼の口から出てきた。

「・・・君はその人助けが正しいと思って今までやってきたのだろう？それならそれが君にとつての正義だ。正義というのは立場や生まれなどで大きく変わる。君とその彼女の正義は全くの別だったんだろう。だから君はそれを理解しようとしたし、彼女は拒絶した」

私の、正義・・・。

「正義の反対は悪ではない。全く相容れられない別の正義だ。悪とはそれをわかりやすく分別しただけで本質は全くの一緒だ。だから気にするな。何と言われようと君は自分の信じた正義を貫き通せばいい。俺はそう思う」

彼の言葉は不思議と説得力があり、私の中にストンと入りこんだように思えた。
「とまあ、偉そうなことを言ったがご要望にお応えできたかな？」

「はい！ありがとうございます！私めげずに頑張ってみます」

と、立ち上がった私はお辞儀をするとその人は笑顔で立ち上がりそれじゃあ頑張れよ響ちゃんと言って歩き出した。私はその背に大きく手を振ってから寮へと歩き出そうとしてふと思ひ出した。

「あれ？私自己紹介したっけ？」

振り返るともう男の人はどこにもいなかった。

「ああ、すまんなセレナ。ちょっとトラブルというかトラブルサポートしててな……。え、マリア激おこ？……。プリンつけるから弁護してくれない？」

転生者は再びお日さまと話すようです

ネトリーへの再構築により前までの話とこれからの話で主人公等々の発言が矛盾することがございますが、

1話から再度、書き直しを行ったため主人公等々の矛盾はなくなったはずですのでゆるーくお付き合ひしていただけるとありがたいです。

あと今回より試験的に知り合いの作者さんの書き方を参考させていただいております。

【立花 響】

「やあっ!!」

武装組織フィーネの蜂起宣言から一週間、私は今フィーネの人たちがいるとされる廃病院に翼さんとクリスちゃん突入してノイズと戦っていた。クリスちゃんがガトリングでノイズの大群を撃って私と翼さんが近づいてくるノイズを倒す。

「はぁ・・・はぁ・・・」

「はぁ、はぁ・・・」

でも、おかしい。私はいつも通りノイズを倒せてるのに翼さんが斬ってもクリスちゃんが撃ってもノイズが倒せてない。さっきから倒そうとしても倒しきれずに再生されるのを繰り返している。

「二人とも大丈夫!？」

「今のところはな。だがギアの出力が落ちてる・・・?」

「じゃあなんでバカだけは大丈夫なんだよ!!」

「そんなこと私に言われても・・・おりゃあ!」

また一体ノイズを倒したところで暗闇の奥から何かが迫ってくるのが見えた。犬みたいなノイズ・・・?

「二人とも気を付けて!!」

迫ってきたのを殴ってもすぐに体勢を立て直して今度は翼さんに突っ込んでいく。翼さんはそれを剣で斬りつけるがそのまま吹っ飛ばされるだけで斬れない。

「アームドギアで迎撃したんだぞ!？」

「なぜ炭素と砕けないんだ!!」

「まさか・・・ノイズじゃない？」

「正解だ」

「!!」

もう一回殴ろうと拳を握りしめ振りかぶったところで、私たちの後ろにいる声に反応して振り向きざまに殴りつける。だが、それは一步も動かず私の拳を受け止めた。

「本当は出るつもりなかったんだが、想定外なことが起きたんでな」

「誰だ!!」

「・・・そんな・・・あなたは・・・」

私は拳を受け止めた相手を見て、思わず腕から力が抜ける。だってその人は私を・・・

「久しぶりだな、響ちゃん。吹っ切れてくれたようで安心したよ」

数日前、相談に乗ってくれた男の人だったのだから

【ケトス・ミューケーナイ】

声を掛けたら思いっきり腹パンされた件について。アジトの留守を預かっていた俺はウエルに特機二課の突入があることを伝え、ウエルは原作通りにノイズとネフィリムのコントロール。俺はいざというときのために後ろから一定の距離を取って追いかけていた。アンチリンカーを散布しても響ちゃんのギア出力があまり下がらなかったのは驚いたが。

「あなたは、ケトス・・・マリアのマネージャーの・・・」

「ああ、翼ちゃんは何度かマリアと一緒に顔を合わせていたな」

「てことはてめえも奴らのグルか!!」

「それよりもなぜ立花の拳を受け止められる!？」

「タネも仕掛けもあるとだけ・・・一応俺ら敵同士だし」

俺がネフィリムがいる方に視線をやると奥からケージとソロモンの杖を持ったウエルが現れる。さらなるフィーネの協力者に驚いている間に響の拳を振り払い、距離を取る。

「博士・・・!?」

「テメエがソロモンの杖を使って」

「ええ、明かしてしまえば簡単な仕掛けですよ」

「杖を奪うために自分を襲わせたというのか」

「ノイズを呼び出し制御できるこの杖の所有者こそ！英雄になるこの自分にこそ相応しいとは思いませんか！」

「思わねえよ!!」

クリスちゃんの心からの叫びと共にミサイルが飛び立つがアンチリンカーにより融合係数が下がった状態で放ったため自らのバックファイアでダメージを負い、その場で崩れ落ちる。それを翼ちゃんが受け止める。ミサイルはウエルが肉壁として呼び出したノイズたちを粉碎し、周りの廃病院の壁を破壊した。

砂煙や爆炎が晴れると既にウエルはネフィリムの入ったケージを飛行型ノイズで飛ばした後ですんなり響たちに捕まった。俺も抵抗する気はなかったし、何より響ちゃんが俺に何か話したがっていたと見るからに明らかだった。

「ケトス・・・さんでしたっけ」

背景で翼ちゃんがネフィリム追撃に走り出したところで響ちゃんが話しかけてきた。

「ああ、本名はケトス・ミューケーナイだ」

「マリアさんたちの仲間なんですね」

「フィーネの後方支援を担当してる」

「・・・あの日のことは私だから近づいたんですか」

「あの日は偶然だった。俺が声かけたのも偶然だ。だがあの時話したことは紛れもない本心とだけは言わせてもらう」

淡々と俺と響ちゃんの間で問答が繰り返され、そばにいるウエルもクリスも聞き入っていた。背景では翼ちゃんが二課の潜水艦本部でさらに高く飛び上がっていた。

「・・・なら尚更私たちは話し合える。わかりあえると思うんです」

「・・・」

響ちゃんが俺に期待するかのようじつと見つめる。俺はしばらく目を瞑りゆっくり息を吐く。ただただ静かに長くゆっくりと間違えないように気持ちを落ち着か

せるように。言葉が出るのを待つ響。だが俺はただ何も言わず海を見るよう促すように視線を海へと向けた。海・・・洋上では翼ちゃんがノイズを斬りネフィリムのケージに手を伸ばしたところでマリアの放ったガングニールの槍に弾かれて海に落ちた。

「!!翼さん!」

「時間には少し早いですよ、フィーネ」

「フィーネ!?まさか!!」

「そう、彼女こそ新たに目覚めし、我々を導くフィーネです!」

マリアと翼の戦闘が始まる。翼が海から飛び出しマリアに切りかかるが再び弾かれ仮設本部艦上に着地する。マリアはネフィリムのケージを上空に放り投げ、ステルス状態のヘリがそれを回収したのを確認すると翼と同じ土俵に立ち槍を振りかざしとびかかる。

それと同時にこちらでも動きがあった。上空から調と切歌の奇襲。それは響の察知でなんとかあったがアンチリンカーによる融合係数の低下に加え2対2という状況はこちら側に利をもたらしただけだ。

「少し早いの帰還で助かりましたよ」

「別にあなたのためじゃない。ケトスのため」

「いやあ、モテる男は羨ましいですね」

「そう思うなら今までの自分の行動について自分の胸によおおお聞いてみる」
そう言つてウエルを回収して二人に合流する。クリスに肩を貸す響ちゃんが俺たち
ちに問う。

「あなただちはいったい何を・・・」

「正義では守れないものを守るために」

上空で待機していたヘリがステルスを解除し、牽引ロープが下がってくる。響
ちゃんの問いに答えた調とウエルを抱えた切歌が牽引ロープを掴みヘリに回収され
ていく。俺も牽引ロープを手に取り引き上げられていく。振り返れば響ちゃんがこ
ちらをじっと見ているが俺が何か言う間もなく、ヘリはステルスを発動。この場か
ら撤収した。

転生者は血で汚れても向き合い続けるようです

どうしてこうなっ たし

今回から過去改変&キャラ改変入ります。

【ケトス・ミューケーナイ】

アジトを二課の襲撃により失った俺たちは速やかに次の手を打つことにした。俺が予めある程度の聖遺物を機内に確保していたとはいえやはりどこかで補給しなければいけないということには変わりなかった。そこできりしらコンビの発案で二人は今日学園祭のため一般公開されてるリディアンに潜入し、可能ならなにかしらの聖遺物を確保するという事になった。念のためセレナにブレイキ役として引率を頼んだので下手に無茶なことはしない・・・はず。

とりあえず待機組は都市近郊の倉庫内にヘリを隠し、三人が帰ってくるのを待つことにした。いやしかった。

「シュッ！！！！」

「うぐう！」

俺の右手に持ったククリナイフが米国兵士の首にずぶりと刺さり、彼の命を終わらせる。一人仕留めた隙について数人、既に事切れたとはいえ味方ごと小銃で銃撃する。俺はそれを最低限の回避だけしつつ左手で先ほど殺した兵士から奪った小銃で迎撃する。大方は防弾チョッキに阻まれ体には届かなかったが、それでも関節部などの部位に当たり体制を崩したところを小銃を捨てて肉薄し、一人、また一人と物言わぬ肉へと変えていく。

俺とは少し離れたところではウエルがノイズを操って圧倒的な無双を繰り広げている。人を殺しておいてあれだけどウエルはやりすぎだろとは思う。たった二人の人間に部隊を壊滅状態にさせられたからか残りは倉庫の外へ逃げていく。俺は別に逃がしても構わんと思うがウエルは逃がさない。

セレナたち三人を偵察に向かわせて数時間後、今ではお馴染み米国本国からの追っ手が襲撃してきた。ママはマリアにシンフォギアでの迎撃を命じたがいくら量産できる人間がいるからってこんなところでリンカーを消費させて溜まるかとい

う理由で俺とウエルで迎撃に出た。まずヘリを破壊できる携帯ロケットランチャーを持った奴を一気に奇襲して仕留める。そこからウエルが正面からノイズ展開し、さっきにつながるといいうわけだ。

俺の周り、辺り一面には命だったものが散らばっていた。ノイズに炭化させられた者、俺に切られた者、奪われた小銃で蜂の巣にされた者……。それらを見渡しているとふと割れたガラス片が目に入った。ガラス片は鏡のように俺の血塗られた姿を映していた。

「せっかくのシャツがな・・・」

マリアのマネージャー時代から愛用していたスーツは上着は名前も知らぬ誰かの首に回したまま、シャツは返り血やらで汚れたところどころ銃弾でボロボロだった。今更誰を殺そうが気には留めないが、悲しむ奴はいた。そう思ったその時、外から叫び声が聞こえた。

「うわあああああああ」

それを聞いた瞬間、俺の体は咄嗟に走り出し米兵たちが出た扉から出ると彼らを追撃していたとされるノイズが偶然通りかかった野球少年たちに襲い掛かろうとし

ていた。

「Epi^加taphs! Sok Apor^衝r^擊 f^敗isi^収!」

間に合わない判断した俺は魔術を詠唱する。体の隅々が何かで繋がりが流れてくるような錯覚を覚えたと同時に俺の体はさっきよりも倍近い速さで今にも襲い掛かるノイズを追い越し、三人の少年を抱きかかえ横に飛んだ。その直後、ノイズは少年たちがいた場所にとびかかった。直後、騒ぎを聞きつけたウエルがノイズをソロモンの杖で消した。

「大丈夫か？」

「あ・・・うん・・・」

「よし、ならさっさと逃げな」

そう言って少年たちを逃がした後、立ち上がると多少申し訳なさそうにこっちを見ているウエルに視線を合わせる。

「すみませんね・・・追撃指示が思わぬ方向に飛び火したようで・・・」

「いや、犠牲は出てないなら問題は無い。戻るぞ」

ウエルがソロモンの杖を懐にしまいながら倉庫内へ戻っていく。

「ママ・・・セレナたちに帰るように言った？」

『ええ、現在帰還中だそうです』

「じゃ、こっちもちやっちゃとへり動かして合流しよっか」

数分後　へり機内

「ふふいゝやっと匂いが落ちた・・・」

廃病院のアジトはシャワーがあつたが今じゃそんなことできやしない。ほんの一日までちゃんと使えていたのにな・・・と思うと無くしてからわかるありがたみと言うのを実感できる。さてウェルと少し計画の詰めでも考えるか・・・。

「ケトス」

ふとマリアに呼び止められた。どうかした？と聞いても無言で俺の手を取り個室へと入っていき、鍵をかける。座席に俺を座らせると靴を脱いで俺の膝に乗り首に手を回し顔を肩にうずめる。ぎゅっと若干苦しくなるぐらい抱きしめるマリア。それを俺は片手で背中に手を回し、もう片方の手を優しく頭に乗せることで答える。

俺たちがF・I・Sにいたころ、幼い少年少女には過酷である実験に耐えかねる子たちが大勢いた。そんな子たちの精神的支柱になったのが集められたレセプターチルドレンの中で一番歳が上だったマリアだった。彼女は、ほかの子たちの姉として甘やかし、少しでもなんとかしようとしていた。だがそんな彼女は誰に甘えればいいのか。その答えがこれだ。一番親しくなお年の近い俺に甘えることだった。歌姫マリアの時もF・I・Sを抜けた今でも時折、精神が不安定になったり甘えなくなるとこんな感じで俺を抱きしめて抱え込んでいることを吐き出す。当事者から見ても彼女の行動は少々度が過ぎてるようにも感じる。確かに今の状態を維持するにはこれがいいのだろうか俺がいつまでもマリアのそばにいられるわけじゃないし、いずれは終わりにしなくちゃいけないと思っている。それでも今はまだこのままで・・・。

しばらく撫で続けてるとマリアが顔を俺の首元に近づけ、すんすんと匂いを嗅いでくる。

「しっかり汗流せてないから臭いぞ」

「うん・・・臭い・・・」

「だから顔を近づけ・・・」

「血の匂いと石鹸の匂いと・・・ケトスの匂い・・・」

そう言ってぎゅっとさらに抱きしめる。足もいつの間にか俺の腰に回っており、セレナとかが見たら顔真っ赤にして破廉恥なああああって叫びそうだなと思いつつ、マリアが行動するのを待つ。するとマリアは俺の手を手にとると手のひらをじっと見つめる。

「いつもそう・・・いつもケトスは血の匂いがする・・・今も昔も初めて会った時もあの時も・・・」

「・・・そうだな」

【マリア・カデンツァ・ヴナ・イヴ】

「誰か！私の妹が!!」

忘れもしない6年前のあの日。ネフィリムの起動実験。歌を介さず完全聖遺物を強制的に起動する実験はほぼ失敗したような状況だった。実験室で暴れまわるネフィリムを私の妹セレナは絶唱で止めた。だが絶唱の強大なエネルギーは実験室とその隣接していたモニタールームを滅茶苦茶にした。瓦礫の山と化した実験室にセレナは立っていた。ただただ立っていた。目から口から血を流した妹の姿。私は助けを求めたママと一緒に観測していた研究者にそれを見ていた出資者に……。でも帰ってきたのは実験失敗に対する罵詈雑言だった。

私の妹はなんのために……

誰か……

誰でもいい……

だれか……私の妹を……

「助けてよ……」

「任せろ……!!」

私の想いに答えたケトスは勢いを増す瓦礫の山に突っ込んでいき、やがてセレナと共に瓦礫に消えた。

「セレナアアアアアアアアアアアアアアアア……!!」 ケトスウウウウウウウ
ウウウウウ!!……!」

崩壊が完全に止まった実験室の中、空しく私の叫び声が響く。私をかばってケガしたママや今になってようやく慌ただしくなった研究者や出資者の声も私には気にならない。ただ私の中には親しい人間を一気にみんな無くしたという二つの喪失感。そして私の願いのせいでケトスを殺したということ、そんな私が生きてていいわけがないという諦め。私はすぐそばに落ちているガラス片を両手でしっかりと握り

しめて先端を自分に向ける。

自分の手が切れ、血が流れだす。痛い。けどこれでいい。

マムの声がする。何を言ってるのかワカらない。

研究者が何カ叫んでる。あなたたちが何をシてるのかワカらない。

出資者が叫んでる。あなたたちがココニイる理由がワカラナイ。

私ハガラス片ヲ自分ノ首ニ刺ス。私ハナンデ生キテルノ？

ガラス片ヲジブンノ首ニサス。痛クナイ。私ハナンデイキテルノ？

ガラスヘンヲジブンノクビニサス。イタミハナイ。ワタシハナンデイキテルノ？

ガラス片ヲ「何してんだお前は。そろそろ俺の手がボロボロになるんだが？」

・ ・ ・ え？

私がハッとして顔を見上げると体中が傷だらけなケトスのちょっと困った笑顔とその背に背負われてる目や口に血の流れた痕のあるセレナの弱々しくもしっかりと

した笑顔があった。

「あ……ああ……セレナ……ケトスうううううううううう……！」
ガラス片を力なく落とし、私は思いっきりケトスに抱き着いた。少しふらついたもののセレナを落とさずに私を受け止め抱きしめ返したケトスからはケトスとセレナの血の匂いがした。後に知ったのだけでもケトスは絶唱の衝撃で部屋が滅茶苦茶になったときその影響で入れるようになった保管室にあった完全聖遺物を盗んでその力でセレナを助けて、自殺しようとする私を止めようと喉に突き刺さるはずだったガラス片をその手で庇ったということ。そして今も手の平には深々と刺さった跡が残ってる。そんなことも知らない当時の私はそのあとずるいとわがまま言ったセレナも一緒に3人で抱きしめあいながら生きててくれたことに泣きながら笑って感謝してた。

それからというものの、私はケトスにべったりしていた。時折ケトスを感じたいと思うようになりそういうときには彼の体をぎゅっと抱きしめた。ちゃんとここにいるんだと、いなくならないと実感するために。ケトスに対する実験が日に日に激しくなるたびにそれは何日かに一回あるかないか、数日に1回、2日に一回、1日

一回と、どんどん彼がいなくなるんじゃないかという恐怖が増えていき、彼を求めるようになった。

そして私たちが決起する１年半前、施設から彼の姿は消えた。彼に対する実験の結果、聖遺物を完全にコントロールできる彼を兵器運用すべきだという声が増えてきたことを危惧したママが手引きし、施設から逃がしたのだ。その事実はママとケトス、そして前日の晩にケトスから知らされた私だけだ。その日は酷く錯乱し、ママとケトス、セレナに迷惑をかけた。その時は私が眠りにつくまでずっとケトスが私を抱きしめてくれていた。そのおかげで脱走した後もなんとか不安定にならずにすんでいた。

そして私たちが脱走し計画を始動させようとしていたところにどこからともかくケトスが物凄く強くなって合流した。それこそ米軍兵士相手なら余裕なほどに。

彼はもういなくならないハズ。それなのに前よりもケトスがいなくなりそうな嫌な予感が日に日に大きくなっている。今はケトスに心配をかけないように我慢しているが、最近になってようやくケトスが何かを隠していてそれを知れることに怯えていることと同時に自分のことを生かすことに執着していないことに気が付い

た。似たような予感を感じていたセレナも同じ結論に至った。彼はいつか私たちのために命を投げ出すかもしれない。そんなことになったら私は……。

想像するだけで体の震えが大きくなりケトスを抱きしめる力が強くなる。それのことを決してケトスは聞かない。ケトスは決して私たちの隠したいことに踏み込もうとはしない。けども私たちは知りたい。ケトスが何に怯えているのか。いつか……言ってくれるといい。そう思ってる。

『マリア、ケトス。起きていますね。そろそろランデブーポイントです。迎える準備を』

マムから連絡が入る。そろそろね。私はケトスの傷だらけの手にキスして立ち上がる。ここからは弱虫なマリアではなく、皆を守るフィーネのマリア。さあ、3人を迎えに行きましょうか。

「ケトス……」

「んー……」

「絶対に世界を救いましょう？」

「ああ、みんなで世界を救うんだ」

ええ、皆が生きている世界で平和を祈ってケトスとセレナとこうやって抱きしめられる世界を・・・

・・・当初の予定ではマリアさんにとってオリ主であるケトスが唯一甘えられる存在であり、時々こそそつと幼児退行とまでは行きませんがかなり甘えるという話だったはずなんですが・・・なんでこうなったんだいやっほう!!!!!!

深夜テンションって怖い

転生者は守るために尽力したようです

平成最後の投稿でございます

ありがとう平成！

よろしく令和！

【ケトス・ミューケーナイ】

カ・ディンギル跡地。かつての特機二課研究者にしてシンフォギアシステムの第一人者である桜井了子ことフィーネの崩れ散った悲願の地を月明かりが照らしている。その崩落したカ・ディンギルの瓦礫に隠れてる俺、そこから少し離れた場所にウェルがソロモンの杖でノイズを呼び出して二課装者を待つ。二課装者が現れたところをノイズを使って分断したところを俺とネフィリムが襲撃してシンフォギアを奪取する作戦だった。

作戦は上手い具合に進み、目論見通り二課装者の連携を断ち各個撃破に持ち込んでいた時だった。アメノハバキリに碎かれたナイフの予備を抜き放とうとした時、横から視界が一瞬ブラックアウトするぐらい強い衝撃を受けて倒れこむ。

『ケトス!?!』

ふいの一撃だったため倒れたがすぐさま体を起こし、衝撃を受けた方へと視線を向ける。暗く見えにくいがあの見慣れた姿は・・・

「翼さん！後ろ!!」

響ちゃんの叫び声に反応した翼が飛び退くと同時に激しい銃声と共に銃弾の嵐が翼のいた場所を通り過ぎた。

「大丈夫ですか翼さん！」

「すまん助かった立花！」

「ぼさつとするな!! 囲まれてるぞ!!」

周囲を見渡せばいつの間に現れたのか俺たちを多方向から囲むように20人前後の兵士たち銃を構えていた。

「こいつらは一体・・・」

「アメリカだ」

「「!?!?!」」

守るべき人間から銃を向けられるという緊急事態に焦っている装者たちへ俺が答えを告げる。彼らの装備は多少重装備気味になっているが昼間に俺たちのアジト（仮）を襲撃した米兵さんたちに酷似していた。無論、彼らの顔はゴーグルとマスクで見られないため断言は出来るわけではないのだが、かと言ってあの米国兵士と同じような装備を別な国やテロリストが用意できるとも考え付かねえ。

「厳密にはお前らみたいな政府お抱えの機密部隊だ。主に暗殺を主任務に置く部隊だ」

「なぜそんな奴らがここにいるんだ!？」

ここにいる理由はおそらく二課をおびき出したノイズ反応をあっちも探知してきただろう。だがそんなことよりもこのタイミングで奴らが現れるなんて原作には無かったはずだ。それだけは覚えていいる。なのになぜ奴らがここにいるか。何かしらイレギュラーがあったのだろう。つまりは

「狙いは我々の所有してる完全聖遺物ですね」

いつの間にかそばに来ていたウエルの言う通りネフィリムにソロモンの杖。あちら側に渡れば強大な戦力となりえる完全聖遺物がこの場にそろっている。それは日本政府に今もなお日本で米国機密部隊が活動しているということがバレてでも取りに行くべきものとあちらの上が判断したんだろう。

「撃ってくるぞ!!」

クリスちゃんの警告と同時にあらゆる方向から銃弾が降ってきた。咄嗟に彼女たちの前に出て魔術詠唱。展開された魔力障壁が銃弾をはじいた。

『ケトス！今からヘリでそちらへ行くわ！それまで耐え』

「来るな!! 撃墜されたらそれこそ一巻の終わりだ!! ウエル！ノイズを奴らにぶつけろ!!」

「既にやっています！ですが・・・」

ウエルの言葉が途切れた理由はすぐにわかった。ノイズと渡り合っているのだ。ノイズに触れても炭化することがなく、奴らは戦っている。と言ってもノイズを一方的に撃滅できているとは言えずかなりの近距離から発砲することでようやくノイズの体を削り取ることが出来ている。

「ノイズに対抗できているのか!？」

「ノイズにはシンフォギアでしか対抗できないはず・・・!」

「一体どんなからくりがあるってんだ!？」

「まさか、RN式？」

「ケトスさんそれって？」

RN式回天特機装束

かつて特機二課の若き天才櫻井了子が開発したシンフォギアシステムと呼称されるFG式回天特機装束。そのプロトタイプとも言うべき対ノイズ装束。聖遺物を歌ではなく着用者の精神力、戦意によって強制起動状態にし、全身にノイズ相手の戦闘に必要な最低限のバリアコーティングが生成される。

「ってやつだ。ちなみに俺がお前たちのシンフォギアに対抗できるのもそれを使ってるからだ」

「櫻井女史がそんなものを・・・」

「まあ、知らねえのも無理はないだろう。なんせ十数年前に米国で開発され凍結された欠陥品だからな」

「凍結？なんでだ？」

「俺のは開発者本人に別口のエネルギー源を確保できるよう改造を施してもらったやつだが、そいつは致命的な弱点として着用者の精神力の消耗は激しく並の兵士では数秒で限界を迎えてしまうはずなんだ」

いくら開発凍結直後から改修され始めたといえど、フィーネが手の施しようがなかった問題を十数年で解決できるわけがねえ。だとすれば弄ったのはRN式の方じゃなくて人間の方か。

「まあ、今保ってるって事実だけあればそんなことはどうでもいい。それよりも立花響、お前たちは離脱しろ。それぐらいなら援護してやる」

「な、なにを言って・・・」

「奴らの狙いが俺たちなのは理解しただろ。ここにいたら容赦なくまた撃たれるぞ」
「・・・・・・・・」

「それにだ。お前たちは自分の身を守るためだからって人にその力を向けられるのか」

「それは・・・」

「別にその覚悟や責任が出来ねえからあーだこーだ文句言うつもりはない。逆にすぐに決めて人にその力を向けるほうがおかしいんだからな。後に奴らに敵対するにしろしないにしろ今ここで決める必要はない」

彼女たちの口が堅く閉ざされる。彼女たちが今までシンフォギアを纏って戦ってこれたのは人を守るためという理由があった。だがその守るべき人に銃口を向けられ自分の身を守るために力を振るう。第3期で立花響がぶつかった壁が半年も早く現れた。ほかの二人はどうかはわからないが確実に立花響は動けなくなる。

「・・・不承不承ながらも了承した」

「！翼さん・・・」

「雪音！全力で走るぞ！ついて来れるか!？」

「へっ、愚問だ！」

「話はまとまったようだな。ウエル！英雄さんたちのために体張るぞ!!」

「フッ・・・それでこそ我々です。ほおーらノイズの出血大サービスだあ！」

「よし！行けっ!!」

懐から小銃を取り出し発砲する。装填されている弾には遠隔操作で魔術が発動す

るように術を書き込んであり、それが地面に着弾。点々とながらも魔力障壁を展開する。その後ろを翼を先頭に響ちゃん、クリスちゃんと続いて走っていく。それに伴い奴らの銃口が彼女らを追っていく。その隙に目の前の魔力障壁を解除。今度はこちらから距離を詰める。

接近に気づいた奴らが再度こちらに銃口を向ける形となったがこれで彼女らは確実に離脱出来る。再度魔力障壁を展開してふとここで頭から抜けていたことを思い出していた。

「ウェル！ネフィリムはどうした!？」

「奴らの襲撃時に一度ゲージに戻しましたよ。奴らに放ちますか？」

「そうだな。ノイズが対抗される以上そこまで人数差を埋められない。ネフィリムも出してさっさとこれを終わらせるぞ！」

【立花 響】

あれからしばらく走り続けたのち二課のヘリとの合流地点までやってこれた私たちは息を切らしながらヘリがくるのを待っていた。

『あと4分ほどでヘリが到着する。もう少し待っていてくれ』

「了解しました」

ケトスさんに言われるがままに逃げてきた私はケトスさんに言われたことを思い返していた。確かに私はノイズを倒すためにシンフォギアを纏って戦うと決めた。でも今日、守るためだからこの力を人にも向けなくちゃいけない場合もあるってことを知った。そのことに怖くなって何も考えられなくなって気づいたら動けなくなってた。ケトスさんがバリアを作り出してくれなかったら私はたぶんあの人たちに撃たれた。そしてそのことを見抜かれてた。私は・・・どうすればよかったんだろう・・・。

『皆、ヘリが到着した。すぐに搭乗を・・・』

『司令！これを!!』

『どうした!!』

『カデインギル跡地でネフィリムが暴走！アメリカ機密部隊、F・I・S双方の被害甚大!!』

「!!」

「!?立花!?」

それを聞いた途端、私の足は無我夢中で走ってきた方向へと走り出した。

【ケトス・ミューケーナイ】

「ガンド!!」

指先から放たれた黒い塊がネフィリムの体に直撃し動きを止める。だがすぐさま動き出し、安易に接近してきた米兵の一人を悲鳴を上げさせる間もなく喰らった。それでもお構いなく俺たちに銃撃していく米兵たち。

「くそが!!」

俺は小銃のトリガーを引き、米兵の一人にこれでもかと銃弾を叩き付ける。しかしRN式のバリアコーティングに弾かれ体には届くはずのない。そんなことは知って

いる。銃弾に仕込んだ魔術が発動し、銃弾が派手な爆発を引き起こし視界を奪う。その隙に接近、強化魔術を腕とナイフに通し力いっぱい突き刺した。バリアコーティングが音を立てて破壊され、そいつの左胸から鮮血が噴き出ると同時にRN式は機能停止する。

「ケトス！後ろです!!」

ウエルの警告に合わせ、ノールックで後ろにガンドを乱射。後ろから俺を喰らおうとしていたネフィリムにそのすべてが着弾。動きを止めた隙に距離を取る。再び動き出したネフィリムは俺との距離を縮めようとして銃弾の嵐に邪魔をされる。気がそちらへと誘導され、今しがた自分に撃った米兵を喰らおうと襲い掛かる。

「あと何人だ!？」

「まだ10人はいますね・・・」

「まじクソゲーかよ」

響ちゃんたちを逃がしたあと、人数不利を覆そうとネフィリムを放った。そこまではない。だがそれが俺たちのコントロール下を離れて暴走すると誰が予想した。ウエルが言うにはRN式という聖遺物を使ったものがこの場にいくつも存在するが

ゆえに本能が刺激され結果、誰彼構わず襲うようになったのではと。運が悪いにもほどがあんだろ。唯一運が良いといえるのは対空兵装を所持した米兵が表立ってネフィリムを攻撃したことで真っ先に食われたこと。

『ケトス！ドクター！現在全速力でそちらへと向かってます。もう少しだけ耐えてください！』

ヘリがこちらの救援に来れるようになったことだ。だがその到着にはもう少しだけ時間がかかるようだ。捕捉されないようにと少し遠くへ待機させたのがあだとなった形だが、俺個人としてはこのまま到着しないでほしいというのが本音だった。彼女たちにはこれ以上何かを背負わせるわけにはいかないという俺のわがままだけだな。

「ネフィリム来ますよお！」

「くっ、俺がネフィリムを相手にする！米兵にちょっかい出させるな！」

口から鮮血を垂らしながら迫ってくるネフィリムを小銃の残弾全部使ってけん制しつつ右手に強化魔術を重ねがける。けん制の爆炎から姿を現したネフィリムの顔面を思いつきり殴り飛ばした。地面に強くたたきつけられる形で吹っ飛んだネフィ

リムだが、ピンピンした姿で立ち上がった。それには俺の精神的疲労がたまる。俺の攻撃が緩んだことで反撃の隙を得たネフィリムは猛スピードで俺に突撃してくる。それを迎え撃とうとしてブツンと何かが切れた音がしたと思うと俺のRN式が機能を停止する。酷使しすぎて機械の方が先に果てたらしい。

と同時に足から力が抜け、膝から崩れ落ちる。

「ケトス!？」

『ケトス!!!!!!』

「くそが、ここでRN式が・・・」

その間にもネフィリムは俺との距離を詰め、大きく口を開けてとびかかり・・・
「ケトスさん!!」

この場から既にいなくなったはずの少女の声と体が突き飛ばされた。

「え」

「——立花 あああ!!!!!!」

声のした方へ顔を向けるとそこにはネフィリムに左腕を持ってかれた響ちゃんの姿があつて――

――それをおいしそうに咀嚼するネフィリムの姿があつた。

「う、うがああああああああああああああああああああ……！！！！！！！！！！」
直後、立花響のとてつもない叫び声が響き渡り、そして、それが引き金となりガングニールの暴走が始まった。響ちゃんの体を闇が包み込む。その姿はまさに悪魔とも言える存在。その圧倒的な威圧感を知っていた俺やウエル、響ちゃんのあと追ってきたとされる翼とクリスちゃん、米兵、そしてネフィリムさえも動きを止めた。

暴走した響ちゃんはエネルギーを形成して左腕にし、ネフィリムへと襲い掛かる。横腹を殴りつけ、顎を蹴り飛ばし、体当たりでその身を地面に鎮める。その体にのしかかり拳を突き刺し、肉をまき散らす。その戦い方はまるで獣の如く。悲鳴を上げるネフィリムの姿にウエルは意気消沈。ほかの装者二人は啞然とし、俺はそれを倒れたまま見続ける。そして右腕に収束させたエネルギーをアームドギアに変え、それをネフィリムに突き刺し、爆発した。爆発のエネルギーは光となって、周辺の者すべてを吹き飛ばした。ノイズ、米兵、装者、人……みんな吹っ飛ばした。爆発の余波から目を覚ますとそこにはネフィリムの姿はなく、暴走した響ちゃんだけが立っていた。

「立花……」

「なんだってんだ……?」

「グウウウウウウガアアアアアアアアアアアアアアアア……!……!……!」

吠える。もはやそこに人は非ず、ただ獣のみ……。

「フウウウウウウ……フウウウウウウウウ……!」

銃撃音。元をたどれば米兵^{この馬鹿ども}たちが響ちゃんに対して銃撃していた。バカが……!

内心毒づいた。やはり響ちゃんは次の目標を米兵たちへと向けた。ダメだ。そんなことは響ちゃんにやらせちゃいけない。腕に、足に、限界以上に力を籠める。ゆっくりとだが立ち上がれてはいる

「立花!! 止まれ!!」

翼が響ちゃんを制止させようとするが、距離があり過ぎた。ゆっくり歩を進める響ちゃんが米兵を叩き潰す方が早い。そんなことはダメだ。例えば暴走が止まっても人殺しをやらせたら、彼女はもう戦えなくなる。本当ならそれがいい。理由がどうであれ少女が命を懸けて戦うということは異常であることに変わりはないが、彼女の明確に人を殺したという事実はいずれ彼女の命を奪う。そんなことはさせない。たとえそれが偽善であってもそれが俺の・・・正義だ。

「ウエル、あとは頼んだ」

ウエルが何か言おうとしたが俺はただひたすらに地を蹴った。

響ちゃんの腕が再びエネルギーを束ね、アームドギアに変えて振りぬく。まさに必殺の一撃。いくらRN式でバリアコーティングされているからと言ってもそんな程度のもので耐えきれはるはずがなく、米兵は塵一つ残さず消し飛ばされ・・・

「させるかあああああ!!!!!!」

魔術で限界まで引き上げた俺の肉体は響ちゃんの目の前に滑り込んだ。次の瞬間、鋭く重い一撃が腹に突き刺さる。何かこみ上げてくるものを感じこらえ切れず吐き出せば、口の中が鉄っぽい味で満たされる。視界を下にやれば俺の腹から真っ黒な響ちゃんの腕が生えていて、それに鮮血が滴っていた。

軽く見積もっても重症。臓器もいくつか消し飛んでるだろう。だが殺させてはいない。彼女の手を汚させてはいない。その安堵感で力が抜けそうになるが今出せる限界以上の強化魔術を重ねがけし、響ちゃんに抱き着いてでも動きを止める。前からは暴走響ちゃんを受け止めつつ、後ろから空気を読まねえ米兵の銃撃に襲われるが、そんなことに注意を向けてはいられない。そのまま響ちゃんを押し返し、投げ飛ばした。響ちゃんは綺麗に受け身を取って俺と相對する。

あつちは長時間の暴走状態にこっちは魔力暴走加えて腹に風穴が開いている状態。これ以上はお互いが持たないと判断した俺は一撃で終わらせるために手を握りしめる。俺の殺気を感じたのか確実に俺の息の根を止めようと地面をける。俺はそれに合わせるように足を踏みしめる。お互い右手に必殺の一撃を込めて振りかぶ

り、そして振りぬいた。先に当たったのは響ちゃんの拳だ。響ちゃんの一撃は俺の左上半身を消し飛ばした。強い衝撃が俺の体中を駆け巡り、俺の体の全てが止まるような感覚に襲われる。そのまま俺の体は地に倒れ

「まだだ」

こむことなく踏ん張り、右手をその隙だらけの胸に叩き込んだ。

「戻ってこい、立花響いいいい！！！！」

叩き込むと同時に響ちゃんの体は光に包まれ、光が消えるとそこにはギアを解除した姿で五体満足の立花響の姿があった。

「よか………った………」

それを認識すると同時に今度こそ俺の体から力が抜け、地面に倒れる。響ちゃんの体は駆けつけた翼とクリスちゃんがしっかりと抱きしめたのを確認し、その意識を閉ざした。

平成最後の投稿にするはずが令和最初の投稿になった件について

この話が終わった時点での主人公の状態。

腹部貫通、魔力暴走による魔術回路の損傷、左半身消し炭。

書き終わって思うなにこの動く死体。なんで生きてるん・・・？いや、一応理

由はあるのよ理由は

番外編 転生者はハロウィンを楽しんだようです

ひっさしぶりでございます！

半年ぶりの投稿ですねえ!! XV良かったねえ!! ノーブルレッドオオオオ!!!!

でも本編じゃないんですごめんなさい。フロンティア事変が誰も欠けることなく
ほぼ原作通りの流れで終わったとしたらの世界線でのハロウィンなのです。

【ケトス・ミューケーナイ】

フロンティア事変より早数日。現在、日本国に事件の最重要人物としてマリアと
ママともども捕まってるケトスでございます。

特機二課と協力してネフィリムを撃破したのはいいですが、米国さんのお偉いさ
んたちがピーチクパーチクほざいて未成年であるセレナ、切歌、調も含めて死刑に

するから引き渡せって言ってきましたが、なんかそば食ってるおっちゃんがF・I・S研究所の情報を米国さんに問いかけてくれたおかげで米国は力の入れ方をこちらでなく自国の地位のために割かなくてはいけなくなり我々は無事日本の権限でなんとかなりそうです。

そうなるって知ってたけどね!!!

まあ、だからと言って無罪放免になったわけじゃなく日本さんも我々の処遇に色々と頭を悩ませておるらしく、さらにちよくちよく話を聞きにくる緒川さんや弦十郎さん経由から英国方面からの圧力がかかっているがなぜなのかがわからず頭を悩ませてるそうさ。すまねえそれ俺だわ。普通に全世界生中継の場で思いつき魔術使っちゃったからたぶんそれ関連で聴取したいんだと思う。まあ、悪い方には行かんと思うけど。

「ところで弦十郎さん、無理を承知でお願いがあるんですけど・・・」

【マリア・カデンツァヴァ・イヴ】

私たちが世界を救って数日。今日も日本政府監視下の元、生活を送っている。部屋から出られないのは窮屈だけでも決まった時間になるとちゃんと食事もあるし、いつ来るかも知れない米国特殊部隊の襲撃に警戒することもなく落ち着ける日々だ。世界を救おうと何もかもかき回した私たちに対しては破格の待遇だと思える。そんな私たちだけでも一つだけ兆通の心配がある。私、セレナ、切歌、調、そしてmam。この5人は同じ部屋だが、一人だけケトスが離れた場所で監視されていること。今更男女云々……とも思わなくてはなかったけども、あの戦いで唯一生身で無茶をしたために治療も含めて分けられたらしい。たまに聴取しにくる特機二課の司令からケトスの無事は聞かされるけども、実際に見ないと落ち着かない。

「はぁ……」

「……またマリアがため息吐いてるデスよ」

「ケトスと会えてないから……」

そこ、自分たちを柵に上げない。いつも寝るときケトスがいなくて心配になって私のベットに入ってくるのよ。セレナ、あなた何仕方ないねって風な顔で私を見て

いるのよ。あなたの方が重傷なの気づいてないの？髪形が日に日にケトスに似てきているわよ？ママ！暖かい目で見ないで！なんか恥ずかしくなってきたじゃない！

「そ、そんなわけない！」

反論してきたセレナの髪形をいつもの髪形に戻しているとコンコンコンと扉をノックする音が聞こえてきた。

「はい、どなたデスカー？」

そう言って切歌が扉を開ける。するとにゅつと伸びてきた腕が切歌の腰をしつかり掴み抱き上げる。

「デデデデース!!」

「切ちゃん!？」

「トリック オア トリイイイイトオオオオオ!!」

扉から姿を現したのは顔にはホッケーマスク。薄汚れ所々返り血のような後が付いた服。切歌を右腕で担ぎ上げ、左手にはマチェーテと小さな籠を持った聞いたことがあ·る·声の大男だった。突然のことに啞然としていたが声でその大男が誰だか

わかった。

「ケトス・・・？」

「いえーす」

そう言って器用に左手でマスクを外すとしばらく見てなかったケトスの顔があった。

「ケトス、その恰好は・・・？」

「だーかーら、トリックオアトリートだって」

「ああ、そういえば今日は10月31日でしたね」

ママが答えてくれたおかげでようやくなんでケトスそんな恰好しているのかが分かった。今日はハロウィンなのだ。仮装を楽しみ、お菓子を楽しむ日。去年まで仮装をせずただお菓子を楽しむ日だったからそこまで頭が回らなかった。

「相変わらず突拍子もないことをしますね・・・。その仮装はどこで？」

「二課の司令さんたちに許可を貰って作ったんだよねえ。いやーそこまで驚いてもらえるなら作ったかいがあったよ」

「もう、驚きましたよ。突然切歌が捕まったと思っちゃったじゃないですかー」

「はっはっは。さてと、皆さん？何か俺に言うことがあるんじゃないですか？」

と、非常にいやらしい笑顔で笑いかけるケトスに少し疑問符を思い浮かべるものしょうがないなと言わんばかりに小さな籠を顔の横でアピールする姿にハッと思いついた。どうやら切歌も調もセレナも気づいたらしい。その顔を見てケトスがセーのと合図を上げたのでタイミングよく口を開いた。

「「トリック オア トリート！」」

私たちの答えにケトスはいい笑顔で「トリート！」と言ってその籠を私に差し出した。中身は小さく梱包されたケトスの手作りお菓子が入っていた。

おまけ

ケトスが女性陣の部屋を訪れる数十分前

ケトス「ほい、トリックオアトリートってことでお菓子どうぞ」

ウエル「ありがとうございますね」

ケトス「お前のは女性陣用とは別の特別製だぜ？」

ウエル「・・・その時点でいやな予感しかしないのですが」

ケトス「まあまあ、食ってみ？」

ウエル「・・・いただきます・・・!!?にっが!!!??」

ケトス「w w w w w w」

なお、ちゃんとしたお菓子もあげた模様

転生者は歌姫を守るためにがんばるよ うです

著者 葉っぱの妖怪

発行日 2019 年 11 月 1 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-

<https://syosetu.org/novel/172562/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。